7月8日のウクライナ情報

安斎育郎

●ロシア軍　英ミサイル「ストームシャドウ」を鹵獲＝ロゴジン氏（2023年7月7日）

ロシアの義勇兵部隊バルスー11 と「ツァーリの狼たち」部隊の司令部は接触線でほぼ無傷の状態で見つかった英国製巡航ミサイル「ストームシャドウ」を鹵獲した。「ツァーリの狼たち」のドミトリー・ロゴジン軍事技術センター長がスプートニクに明らかにした。

「それ（編集：ミサイル）は壊れていたのは一部だけで、非常にうまい具合に平たい面を下に落下した。ミサイルはうちのセンターの技師の手でフガスや累積に関する部分はこっち、制御ユニットはこっちとまさに戦場でいくつかの部位に分解され、運搬しやすいように翼にたたまれた」ロゴジン氏はこう語っている。

ロゴジン氏は、ミサイルには非常に高度な電子機器が使用されており、落下時の過負荷に耐えたと述べた。戦利品となったストームシャドウの撤去作業は 2 日間を要した。

戦利品のミサイルは設計と内部の研究のために専門家に引き渡された。ロゴジン氏は、このおかげでロシアの軍産複合体はストームシャドウに対抗する最も効果的な方法を見つけることができると指摘している。

●【視点】英国防相、ミサイル「ストームシャドウ」の有効性を豪語　でも実際は？（2023年6月28日）

英国のベン・ウォーレス国防相は 26 日、ウクライナに供与した長距離ミサイル「ストームシャドウ」が「戦場に重要な影響を与えている」と表明した。だが、軍事専門ポータル「Military Russia」創設者の軍事専門家、ドミトリー・コルネフ氏がスプートニクに語ったところによると、ウォーレス国防相はいささか状況を誇張しているようだ。

ストームシャドウとは

英政府は 5 月、ウクライナの反転攻勢を前にストームシャドウの供与を発表した。

ストームシャドウは英国とフランスが共同開発したステルス巡航ミサイルシステムで、射程は250キロメートル以上。重量は 450 キログラムの通常弾頭を含む計 1300 キログラムとなっている。この

「奇跡の兵器」の 1 発あたりの値段は 319 万ドル(約 4 億 6000 万円)となっている。現在、製造された総数は 3000 発を超える。

ウクライナ軍でストームシャドウを運用しているのは、これまでに撮影された映像などから戦闘機「Su-24M」だとみられている。

ウクライナでのストームシャドウの目的と役割

ウォーレス国防相は 5 月、長距離ミサイル供与について、ウクライナの「自衛能力を高める」と表明。一方で、ここでの問題はストームシャドウがウクライナ軍によるロシア領奥地への攻撃に使われるかどうかだった。

ロシアのセルゲイ・ショイグ国防相は今月、ウクライナ指導部は西側諸国から供与されたストームシャドウや多連装ロケット砲「HIMARS」などを使い、クリミア半島を含むロシア領を攻撃する計画を立てていると表明した。

実際に声明の 2 日後、ウクライナ軍はヘルソン州とクリミア半島の境界にある橋をミサイル攻撃し、橋の舗装が損傷している。この際に見つかったミサイルの残骸にあった刻印から、攻撃はストームシャドウによるものだったと考えられている。

コルネフ氏はストームシャドウの有効性に関するウォーレス国防相の発言は、クリミア半島で攻撃を受けた橋のことを念頭にしていると指摘。橋には複数のミサイルが発射され、そのうち 1 つが着弾したという見方を示している。

「確かにミサイルの能力を示す見事なイリュージョンだ。だが、これが物流網に与えたダメージはいかほどだろうか。第一に攻撃を受けた橋はクリミア半島と本土をつなぐ動脈の 1 つに過ぎない。第二に、損傷は受けたものの橋自体は残っている。この例だけではない。ストームシャドウはその他たくさんの場所で使われているが、大きな役割は果たせていない」

また、コルネフ氏は、ストームシャドウがロシア軍によってよく迎撃されていることにも言及した。さらに露国防省によると、ウクライナ軍の橋の攻撃の後、ロシア軍はフメリニツキー州にあるストームシャドウの保管庫を破壊している。

英国が供与したミサイルが紛争の「突破口」とならなかったことを示す一番の証拠は、ストームシャドウが導入されてから行われたウクライナ軍の反転攻勢そのものにあると、コルネフ氏は続ける。

「ウクライナ軍が反転攻勢開始を宣言したとき、事前に一連のミサイル爆撃の試みが行われた。ストームシャドウも使われたが、結果は出ていない。つまり、ストームシャドウは期待していたほど有効性がないか、使用に関する体制に問題がある。もしくはウクライナ軍の反転攻勢に関する全ての問題が現在に至るまで空転していることから、重要な成果を出せていないということになる」

●「紛争が始まる前からその中心にいた」 米メディア、ウクライナ紛争への CIA の関与について報じる（2023年7月6日）

米ニューズウィーク（NW）は、ウクライナでの米中央情報局（CIA）の活動規模に関する記事を掲載した。NW によると、CIA はウクライナ紛争が始まる前からその中心にいた。現在ウクライナを秘密裏に支援しているのが、まさに CIA だ。彼らは物流担当者や情報提供者などの役割を果たしている。その活動のために、民間航空機を使った兵器の密かな輸送が維持されていたり、ウクライナやロシアにいる自分たちの工作員と通信するための拠点がポーランドにつくられた。一方、CIA は、兵器供与の際の汚職など、さまざまな問題に直面している。また CIA は、ウクライナのゼレンスキー大統領が自国の軍を完全に管理下に置いていない可能性を懸念しているという。

ウクライナ紛争への CIA の関与

Newsweek の消息筋によると、CIA 工作員は何度もウクライナを訪れ、新しい兵器やシステムを使った活動でウクライナを支援した。CIA の活動は厳しく規制されており、ウクライナに一度に滞在できる職員数は 100 人未満に限られていたという。

匿名を希望する米情報機関関係者によると、CIA はウクライナ紛争に積極的に関与しており、紛争が始まる前からその中心に位置していた。

一方、情報筋は、CIA 工作員はウクライナ紛争に直接的には関与していないと強調したている。CIA は「主要なスパイ、交渉人、情報提供者、物流担当者」などの重要な役割を果たしている。まず、状況が制御不能にならないように管理しているという。

ウクライナへの兵器供与は民間航空機を使って秘密裏に行われている

NW は、ウクライナに兵器を輸送するために米国が 2 つの主要な輸送ネットワークを維持していることを明らかにした。そのうちの 1 つは国のネットワークで、もう 1 つは地下ネットワークだ。貨物は船でベルギー、オランダ、ドイツ、ポーランドの港に公然と運ばれたあと、トラック、列車、飛行機でウクライナに輸送される。また、民間航空機の集まりである所謂「グレー・フリート」が、中央と東欧を横断して兵器を秘密裏に輸送している。NW の情報筋は、もしこれらの航空機の詳細が明らかになれば、ロシアは「その拠点とルートを攻撃するだろう」と語っている。

一方、CIA は兵器の供与を背景に東欧で汚職に直面した。匿名を希望する米情報機関の関係者によると、米国の情報機関は兵器の供与先を注意深く追跡しており、ウクライナに巨額の資金が送られることに関連した横領や賄賂の防止に取り組んでいるという。

CIA はポーランドを通信拠点として利用している

NW は、CIA の実務従事者はロシアやウクライナにいるスパイを含む大勢の工作員と

ポーランドからやり取りできると主張している。ポーランドの複数の基地に CIA のほぼすべての特別行動センターの職員が配置されており、ウクライナの同業者や 20 カ国の特殊作戦部隊と協力しているという。

NW によると、紛争開始から約 1 か月後に、ポーランドを通信拠点として使用することについて合意した。当時、CIA のバーンズ長官がポーランドの情報機関トップと会談するためにワルシャワに飛んだという。

CIA はゼレンスキー大統領がウクライナ軍を完全に管理下に置いていない可能性を懸念

CIA は、ゼレンスキー大統領がウクライナ軍を完全に管理下に置いていない可能性を排除していない。クリミア大橋が攻撃されたあと、CIA はゼレンスキー氏が自国の軍を完全に管理下に置いていな

かったか、あるいは特定の行動について知ることを望んでいなかったことを知ったという。匿名を希望する情報機関関係者が NW に語った。

橋が攻撃されたあと、ウクライナの首都キーウ(キエフ)から約 1237 キロに位置するロシア南部エンゲリスにある軍用飛行場が攻撃された。高官によると、CIA はこれらの攻撃について事前に知らなかったが、その発生源を明らかにしようとしたという。

●西側がウクライナに供与した武器がフランスの抗議デモで使用されている＝露ザハロワ報道官(2023年7月6日)

ロシア外務省のザハロワ報道官は 6 日、ウクライナに供与された武器がフランスのデモ参加者の手に渡り、警察に対して使用されていると指摘した。

6 月 27 日、パリ郊外でアルジェリア系の 17 歳の少年が、交通検問中に警察に射殺された。当局は少年が走り去ろうとしたためと説明している。殺害されたナエルさんは、今年警察の取り締まり中に命を落とした 2 人目の犠牲者となった。報道によると、同様事案によって昨年は 13 人が死亡している。事件のあと、フランス各地で大規模な抗議活動が起こり、一部は暴徒化した。4000 人以上が拘束され、その多くは未成年者となっている。

「西側諸国、北大西洋条約機構(NATO)、フランスが供与している武器そのものや、彼らがウクライナ領内の民族主義者、ナチス、ファシストを支援するために注ぎ込んでいる資金そのものが、ブーメランのように彼らの領土に戻ってきているだけでなく、自国民を襲っている」

兵器はウクライナ向けだけではない

現在、西側諸国がウクライナに供与した武器がすでに闇市場に出回り、そこから世界中の別の紛争地域に「拡散」し、組織犯罪、テロリスト、さまざまな種類の過激派の手に渡っているという証拠がたくさんある。

ウクライナの兵器は欧州を経由してアフリカへ流れており、アフリカにはウクライナから大量の兵器が流入している。大量の密輸はすでにその「成果」をもたらしている。中央アフリカと南アフリカでは 2022 年、テロ事件数が過去数年間と比較して 50%増え、西アフリカでは 20%増加した。アフリカの専門家らがスプートニク通信に語ったところによると、武器はギャング、犯罪組織、テロ組織、また小規模の武装集団など、あらゆるグループの手に渡っており、アフリカ大陸の緊張は高まる一方だという。

イスラエルのネタニヤフ首相は最近、西側諸国がウクライナに供与した対戦車兵器がイスラエルの国境に現れ始めていると語った。

ロシアの専門家たちによると、武器拡散のコントロールが弱い場所で武器が出現している。闇市場に流れているのは、主に歩兵用の武器や小型の防空システムで、これらは転売されることが最も多く、追跡が困難とされている。

●ロシアの大砲は欧米製とどこが一番異なるか　退役大佐が説明（2023年7月7日）

ロシア人退役大佐で軍事評論家として活躍するヴィクトル・リトフキン氏はロシア製兵器が欧米の兵器と一番異なる点はロシアの大砲の構造にあると指摘した。リトフキン氏は露イズヴェスチヤ紙からの取材に答え、構造の違いから、ロシアの兵器は欧米のそれと異なり、速いテンポでの射撃に持ちこたえることができると語っている。

リトフキン氏によれば、西側の大砲は主に攻撃用で、発射の集中度の低い「遠征戦」を行うために作られているため、砲身が軽量で迅速に再配置が行えることが重要だったが、ロシアの大砲の目的はそれとは異なる。

「ロシアには極めて集中的な戦闘行為が行われていた大祖国戦争での経験がある。戦争終盤でベルリンを争奪する際、ソ連は戦線１キロあたり 100 基の兵器を配置した。それほど集中的な火力戦だったわけだ。このことから、ロシアでは前々から砲身は強靭な鋼鉄を用いて硬化させるという伝統が出来上がっている。アップテンポの砲撃に耐えられるように。そしてこれがウクライナで活かされているというわけだ」

リトフキン氏は、米国製の牽引式榴弾砲 M777 は射撃回数の多さには耐えられないと指摘する。

「現在、ウクライナは１日に１万 1000 から１万 2000 発を発射しているが、西側の榴弾砲でこんなアップテンポの射撃に耐えられる武器はない。欧米の武器はさっさと壊れてしまい、修理や交換が要される。西側はこれほどアップテンポの射撃を想定していない」リトフキン氏はこう述べた。

●中国、レアメタル２種に輸出規制　半導体の価格に影響も（2023年7月6日）

中国は８月１日から、半導体の製造に必要不可欠なレアメタルであるガリウムとゲルマニウムの輸出規制を始める。中国商務省の束珏婷（シュ・ジュエティン）報道官が６日、定例会見で表明した。

半導体はパソコンやスマホ、家電製品など民生品用のものから、ドローンやミサイルなど、軍事転用可能なものまで様々だ。現在、その製造に必要なガリウムとゲルマニウムの世界シェアは、中国が約８割を占めているとされる。

中国商務省と税関は３日、ガリウムとゲルマニウムの輸出規制の強化について、公式ウェブサイト上で公表していた。

６ 日の会見で束報道官は、国家安全保障と国際的義務の履行の観点から、ガリウムとゲルマニウムの合法的な使用を保証するため、輸出を許可制にすると説明した。

「ガリウムとゲルマニウムの関連製品には、軍事・民間目的の両方の二重用途特性がある。そのため、輸出規制措置の導入は国際的にみても一般的な慣行である」

束珏婷（中国商務省報道官）

一方、束報道官は「輸出規制は輸出禁止ではない」と強調。中国当局のルールに即して許可を得れば、これらレアメタルの輸出は可能だとした。

また、この措置は「特定の国に向けられたものではない」と主張。さらに、米国や欧州連合（EU）などの当局にはすでに通達したと加えた。

半導体を含む先端技術分野では、米中間の禁輸、規制合戦が激化している。今回の規制措置も米国をはじめとする西側諸国へのけん制だとする見方もある。日本も １ 月、米国、オランダとともに、先端半導体製造装置の中国への輸出を規制することで合意している。

ロシアの産業アナリストのレオニード・ハザノフ氏は、規制の運用次第では世界の半導体価格に影響を与える可能性もあると指摘する。

「もし仮に今中国が輸出を停止するとすれば、ガリウムとゲルマニウムを原料とした半導体の値段は大きく跳ね上がるだろう。中国以外の国がそれらを代替することはできない。海外では原料が足りずに操業停止に追い込まれる工場が出る可能性も否定できない」

レオニード・ハザノフ（産業アナリスト）

●【ルポ】モスクワでしかできない夢のバレエ発表会　日本とロシアをつなぐ数少ないものを大切に（2023年7月6日）

6 月 10 日、モスクワ市内のグベルンスキー劇場で、モスクワ在住の日本人の子どもたちが参加するバレエ発表会が開催された。指導にあたったのは、モスクワ州アカデミー劇場「ロシア・バレエ」団で長年バレリーナとして活躍し、現在は同団の教師を務める千野真沙美さん。「ロシア・バレエ」所属のバレリーナ福田汐里さんや仙場花奈さん、モスクワ州クラスノゴルスクバレエ学校の生徒たちがゲスト出演し、温かい雰囲気の中、盛大な拍手が送られた。

これまで在ロシア日本大使館や劇場小ホールで開催してきたが、今回は「ロシア・バレエ」ヴャチェスラフ・ゴルデーエフ芸術監督のはからいで、バレエ団が拠点とするグベルンスキー劇場の大ホールで開催することができた。ウクライナ情勢を受けてモスクワに滞在する日本人の数は急減し、千野さんのスタジオに通うのはわずか 9 人。それでも、2 部構成で、ゲスト出演を含め 29 演目から成る充実した舞台となった。観客席からは「とても小さな子もしっかり踊っていてびっくり」「楽しかった。バレエや音楽は、日本とロシアをつなげてくれる数少ないもの」といった声が聞かれた。

「プロのバレエアーティスト、ダンサーを目指すバレエ学校の生徒たち、そして趣味としてバレエをやっている日本の子どもたちが同じ舞台で共演するという、得難い経験だったのではと思います。バレエに真剣に取り組めば、将来どのようになれるのかを体感できるわけですから。今日の発表会だけでなく、日本の子どもたちは、ロシア・バレエのプロの舞台に、ゲスト出演してきました。最近では『眠れる森の美女』全幕の中で「一寸法師と人喰い鬼」を定期的に上演しています。観客の反応もよく、拍手はもちろん、声援も飛んでいます。プロ仕様の衣装を着て化粧をし、プロの踊りを見てさらに同じ舞台に上がるということは、子どもたちの発展につながりますし、バレエとは何なのか理解するとても良い方法です。真沙美さんの、我がバレエ団における長きにわたるキャリアのおかげで、このような良い関係が出来上がっているのです」

千野さんが日本人の子どもたちに指導を始めて 14 年。駐在員の家庭がほとんどで、メンバーの入れ替わりが激しく、年齢や経験も異なる中で、作品を作り上げていくのは至難の業だ。それでいながら、この一年の間には、「文化の季節」コンクールを皮切りに、審査が厳しいことで有名な「DANCE MOSCOW」や、「クレムリンの星」といったロシアの著名なコンクールに挑戦し、上位入賞を果たしてきた。コンクール参加作品は、発表会でも披露された。

「発表会を終えて、子どもたちも保護者の方も、達成感があったのではと思います。やっぱりみんな、舞台が好きですよね。舞台に出て、これは良い！と思うと、なかなかバレエをやめられないというのがあります。今回、発表会をしよう、という話になったのはかなり直前でしたが、コンクールを含めたこれまでの頻繁な舞台経験のおかげで、作品の数は揃っており、レパートリーを補強することで、開催に至ることができました。ヴァリエーション（ソロで踊る主役級の踊り）が中心の日本のコンクールと違って、ロシアのコンクールはアマチュア部門とプロ部門にわかれており、団体で出られるので、その点では気楽に参加できます。そこで良い結果を収めたことは子どもたちの自信になっています。今回、人数が少なくても、舞台は作れるということを再認識しました。日本ではなかなかこのようなスタイルのお教室は考えられないと思いますが、私は喜んでやっています」

千野真沙美さん

レッスンでは、全員に目を行き届かせ、それぞれの子が、その子なりのレベルで上達していくことを

評価している。本来であれば、脚を外側に開く、ポジションの練習など、基礎を積んでバレエの形にしなければいけないところだが、週２回しかないレッスンで全てをカバーすることはできない。それよりも作品として「揃える」ことを重視しながら、優しくも厳しい指導を行っている。

バレエで生きていくことはもちろん難しい。千野さんは「子どもたちは、モスクワでバレエが大好きになって日本に帰っていきますが、受験や様々な事情で、ほとんどの子たちがバレエを続けることができていません」と残念そうに話す。ほんの趣味であっても一流の教師やダンサーから刺激をもらえるモスクワの環境は、それだけ特殊だと言えるだろう。

千野さんは、バレエ団でも多忙を極めている。教師としてプロダンサーの技術向上や、上演される機会が少なくなった古典バレエの復活にも取り組む。19 世紀後半、マリウス・プティパにより振り付けられた「騎兵隊の休息」は、千野さんのアレンジによって「ロシア・バレエ」の舞台でよみがえった。このような古典作品を再振り付けする試みをこれからも続けていく。そしてより大きなバレエ、全幕作品を作りたいという夢もある。

発表会を終え、子どもたちのレッスンは再始動した。スタジオをオープンして以来、「じっと安心していることはなかった」と言う千野さん。今後もレッスンをレベルアップしながら、作品を作り続けていく。千野さんのあふれるバレエ愛が、全てをこなすバイタリティにつながっている。

●モスクワで日本人ふたりが主役を務める「白鳥の湖」公演、バレエ大国ロシアで快挙（2021年9月21日）

７日、バレエ大国ロシアの首都モスクワで、福田汐里（ふくだ・しおり）さんと千野円句（ちの・まるく）さんが主役を務める「白鳥の湖」の舞台公演が行われた。ダンサーの層が厚いロシアで、男女とも日本人が主役を踊ることはきわめて稀だ。しかも古典の代表作・白鳥の湖となるとなおさらである。二人の共演を実現させたモスクワ州アカデミー劇場「ロシア・バレエ」のヴャチェスラフ・ゴルデーエフ芸術監督に話を聞いた。

ロシア・バレエってどんなバレエ団？

ロシア・バレエはユニークな歴史をもっている。もともとは 1981 年に、ボリショイ劇場所属のバレリーナの発案で 16 人の有志グループとして発足し、モスクワ州や他都市で公演を行っていた。ソ連時代、オペラバレエ劇場は全国に 18 か所しかなかったため、地方へ出かけていってバレエを啓蒙できる若いグループは貴重な存在だった。

その小さなグループを、当時ボリショイ劇場の大スターだったゴルデーエフ氏が引き継いだ。ゴルデーエフ氏は弱冠 36 歳でソ連人民芸術家の称号を得ており、イタリアやスペインなどヨーロッパ各地からも公演依頼が絶えなかった。バレエ団の規模を拡大するにつれて 2 度改名し、現在の名称になった。全くバレエには縁がないと思われていたインドや中国への海外公演を実現するなど、常に時代の先駆者であり続けた。

その先進性は、外国人を起用したことからもわかる。その第一号が、千野円句さんの母、千野真沙美さんだ。今でこそロシアで活躍する日本人バレリーナは珍しくないが、当時はソ連出身以外の外国人にとって、実力があっても舞台への門は非常に狭かった。

ゴルデーエフ氏は国籍に関係なく努力と実力で評価する方針を貫き、真沙美さんは数々の舞台で主要な役を務めた。2019 年には自身の 50 歳の記念公演で円句さんと共演。現在はロシア・バレエで指導を行うとともに、モスクワ在住の日本人の子どもたちにバレエの楽しさを伝えている。

日本人の規律正しさはバレエ団に好影響

ゴルデーエフ氏は長年、日本におけるバレエコンクールの審査員長を務めた。彼の執務室には市長からの感謝状が飾られている。ゴルデーエフ氏は、日本人のバレエに対する真剣で真面目な姿勢を高く評価する。

「創造においても、普段の生活においても規律正しくあるべきだし、バレエ団のメンバーには、責任感をもって自分の仕事をすることを求めています。日本人はとても規律正しい。それだから、日本人は多くを成し遂げました。外国との仕事に優先順位をつけるとしたら、日本とドイツを選びます。この 2 国は自分の言葉に責任を持っているので、合意したら、ちゃんとその通りになります。うちのバレエ団にはたくさんの日本人がいます。彼らは信頼のおけるダンサーだし、指導者から注意されたことを受けとめ、それを改善しようと真剣に取り組んでいます。」

7 日の公演は在ロシア日本大使館、ジャパンクラブ、日本センターが実施するフェスティバル「日本の秋」の一環として開催された。とは言え、ゴルデーエフ氏は、条件が揃わなければ、日本人ふたりを同時に主役にすることはなかったと断言する。

「彼らには踊る権利がある。だからフェスティバルに参加すべきでした。権利がなければ、どんなフェスティバルもコネクションも、助けにはなりません。現在ロシアには数組の、優れた日本人ペアがいますが、彼ら全員に白鳥の湖をキャスティングできるかというとそうではありません。他の演目なら良いのですが、白鳥の湖に関しては、手足の長さや身長など身体的な条件が整っていることが不可欠なのです。」

ロシア・バレエに所属する福田汐里さん。日本でのコンクールに出演した際に踊った黒鳥のヴァリエーションがきっかけで、ゴルデーエフ氏の目にとまり、ロシア行きを打診された。現在入団 8 年目で、白鳥の湖ではすでに何度も主役を踊り、海外公演にも参加している。福田さんの目下の目標は、「眠れる森の美女」で主役を踊ることだ。

福田さん「今回はいつもと違うパートナーと踊ることでたくさんの発見があり、とても楽しかったです。ロシア・バレエはアットホームなバレエ団で、毎回舞台のたびにメンバーが応援してくれるし、何か問題があっても励まし合える居心地の良い環境です。これからも毎回、頂く公演を一つずつしっかり踊っていきたいと思います。」

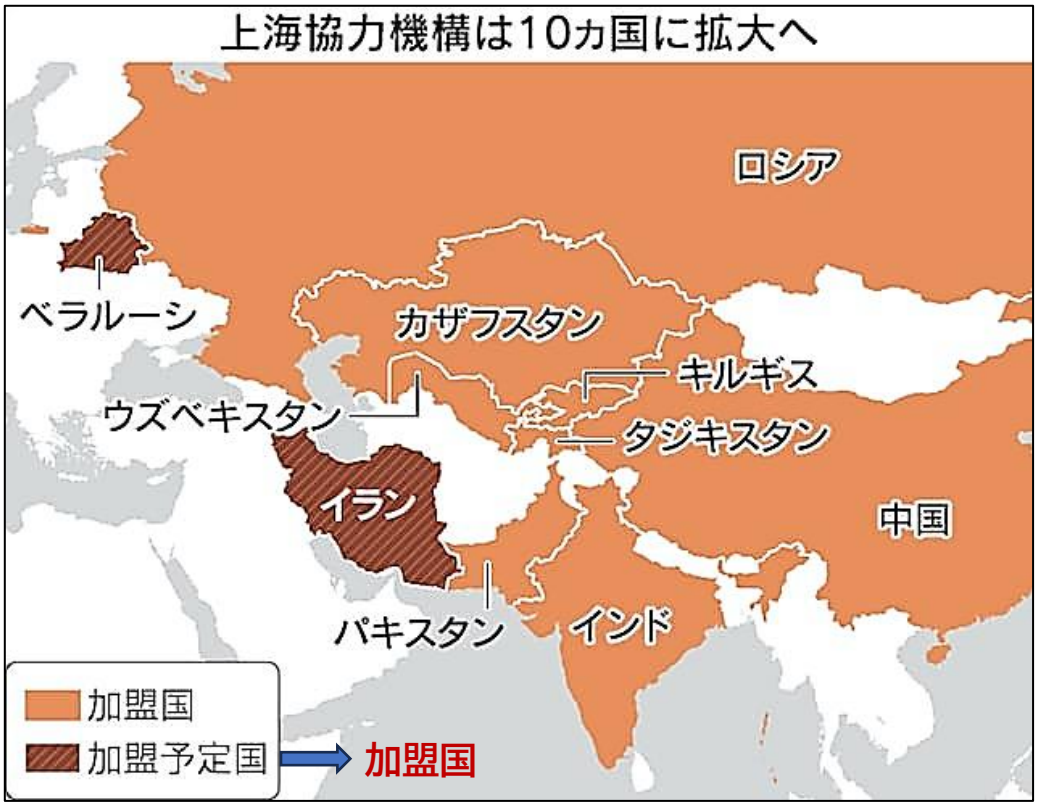
千野円句さんはロシアの名門・ボリショイ劇場のダンサーで、今回の公演にはゲストとして参加。184 センチの長身で気品ある王子を演じた。舞台を終えて「夢が叶って幸せ。すごく早く終わってしまったので、もっと踊りたい気持ち」と振り返った。

開演直前まで入念に準備をしていた円句さん。「ここ（ロシア・バレエ）の振り付けはパントマイム、演技の部分が豊富で、そこを確認していました。踊りだけでなく演技も極めないと。今回は初めて王子役で舞台に立っただけあって、やりたかったことを全部できたわけじゃないので、もっと踊りたかったです。」

今秋、ボリショイ劇場に所属して 5 シーズン目を迎える。3 シーズン目は、怪我とコロナの影響でほとんど舞台に立てなかった。ボリショイ劇場はロシアバレエの最高峰として数多くのダンサーを抱えている。その中で主要な役を得るのは、大変なことだ。

今シーズンの目標については「まだコールドバレエなので、できるだけ多くの役を練習して、踊らせてもらえるように頑張るしかない」と話す。すでにボリショイ劇場の白鳥の湖では、ロットバルト（悪魔）を踊った経験がある。いつかはボリショイの大舞台で、王子を踊るのが夢だ。

●上海協力機構にイランが正式加盟



プーチン大統領

「イラン・イスラム共和国が、私たちの組織に参加することになりました、ライシ大統領を温かく歓迎します」

「外部勢力が反ロシア国家（ウクライナ）創設プロジェクトを実施し、8 年間ドンバスを侵略、ネオナチ・イデオロギーに夢中になった」

「加盟国との貿易額が過去最高の 2,630 億ドルに達した、CIS 諸国との取引におけるルーブルの割合は 40%を超えた、ロシアと中国の取引の 80%がルーブルと元で行われている」

https://twitter.com/i/status/1676665299599527936

●風刺漫画

●【まとめ】国防費の増額やウクライナへの長期支援　NATO 事務総長、来週の首脳会議で予定している内容を語る（2023年7月7日）

北大西洋条約機構（NATO）のストルテンベルグ事務総長は 7 日、リトアニアの首都ビリニュスで 11

～12日に開かれるNATO首脳会議を前に記者会見し、NATOとウクライナの今後の関係や、NATOの新地域防衛計画の承認について語った。
主な発言は以下の通り。
　NATO はビリニュスで開催される首脳会議で、ロシアやテロといった NATO の主な「脅威」に対応するための 3 つの地域防衛計画を承認する予定。
　NATO の新たな防衛計画には、欧州に高い即応性を持つ部隊を 30 万人配備することが含まれる。
　NATO 加盟国は、国防費の最低値を国内総生産（GDP）比 2%にする。
　NATO 加盟国の国防支出は 2023 年に 8.3%増加し、過去数十年で最大の伸びになる。
　ビリニュスで開催される首脳会議では、各国がウクライナを NATO 加盟に近づける措置で合意する見込み。また、ウクライナ・NATO 理事会も設置される予定。
　NATO は、ウクライナ向けに 5 億ユーロ相当の追加支援パッケージ（燃料や医薬品を含む）を準備している。
　NATO 加盟国は、ウクライナへの砲弾の供与を増やす。
　ウクライナへのクラスター爆弾の供与に関する決定は、NATO レベルではなく、NATO 加盟国が独自に行うべき。
　数日前、ストルテンベルグ氏は、NATO 事務総長の任期が 1 年間延長されたと発表した。同氏は 2014 年 10 月に事務総長に就任した。